2011/04/05

2011 年度新入学生を迎えるにあたって

公立大学法人山梨県立大学長　伊　藤　　洋

今日、ここに横内正明山梨県知事をはじめ山梨県内各界の代表のみなさま、また本学がご指導いただいている関係機関・組織の皆様のご列席を賜り、国際政策学部 100 人、人間福祉学部 96 人、看護学部 102 人、以上３学部合計 298 人、および大学院看護学専攻修士課程 8 人の新入学生を迎えて、第 7 回入学式が開催できますことは、私ども教職員ならびに在学生にとりまして大いなる喜びでございます。また、入学生のみなさんを今日まで育んでこられたご家族・ご親族の皆さん、その他彼らに関係するすべての人々に、衷心からお慶びを申し上げたいと存じます。

今日の喜びの日に当たってまことに残念でありますが、この度の東日本大震災は甚大な災厄を残しました。この災害に見舞われた人々に対しまして心からお見舞い申し上げますと共に、この災害に不幸にして遭遇した本学の在学生ならびに入学生に対しましては、山梨県立大学はその学業が継続できるよう最善の支援をして参ります。まず初めにこの事を申し添えておきたいと思います。

今日は、開式に当たって、このたび新たに制定致しました山梨県立大学憲章をはじめて公表致しました。本学は、その淵源を辿れば 1966 年創立の山梨県立女子短期大学と、1953 年創立の山梨県立高等看護学院を前身とする山梨県立看護大学とを統合して、2005 年 4 月に創立された山梨県立大学を、さらに昨年 2010 年 4 月 1 日を期して公立大学法人山梨県立大学として経営形態を変更して、今日に至ったものであります。この公立大学法人化を機に、

学生教職員から新しい大学に相応しい「大学憲章」を制定すべきだという意見が澎湃として盛り上がってまいりました。かくしてこの一年、教員・職員・学生による会合を何度となく開催して、今日こうして発表にこぎつけたものであります。

今日入学された皆さんを交えて、私たち山梨県立大学人は、この憲章が謳う高邁な理念の下に研究・教育＝学習・地域貢献など諸活動にまい進してまいります。

さて、時代は今、疾風怒濤の逆巻く激動の時を迎えております。この度の東日本大震災によって十分に傷んでしまった日本は言うに及ばず、パックス・アメリカーナと呼ばれ第二次世界大戦後の世界の基軸を良くも悪しくも支配してきたアメリカの力が急速に弱まって、世界は政治的にも経済的にも多極分散化が極まってまいりました。こういう激動の中で、前世紀までは日米欧の三極構造の中で世界に対峙してきた我が国の政治・経済的力量は、中国やロシア・インド・ブラジル・アセアン諸国など新たな新興国の出現の前に相対的な弱体化が否めません。それだけに、皆さんは、皆さんを育ててくれた両親たちとは相当に異なった道を歩まなくてはなりません。先ずその覚悟を今こそ固めておきましょう。

今から30年前の1980年、アメリカの未来学者アルビン・トフラーは世界的な大ベストセラー『The Third Wave（第三の波）』という本を出版いたしました。第三の波とは、農耕社会が世界中で確立されていく過程を「第一の波」、それが鉱工業などの「産業化社会」という「第二の波」によって根本的に改変され、そしてまた今、脱工業化社会、すなわち「情報化社会」へという「第三の波」によって一新されようとしている、という文脈で使われていました。

アルビン・トフラーは、「第二の波」で総称する産業社会を律していた基本的特徴として、「Standardization（規格化）」、

「Centralization（中央集権化）」、「Synchronization（同時化）」、「Maximization（極大化）」、「Concentration（集中化）」、「Specialization（分業化）」の六つを上げていました。たしかに、産業社会の特徴は大量生産・大量流通・大量消費であり、それを実現するためにはすべての部面で「中央集権」の下で制度や仕組みを「規格化」し、様々な部面で「専門家」と言う人々によって、「同時化」された環境の中で、「集中化」「分業化」して生産を「極大化」することが必須の要件でした。第二の波はこれらの原則を忠実に実行することで人類史上空前絶後の成功をおさめました。しかし、この波を永久に維持するためには、無尽蔵の資源と、廃棄される塵芥のすべてを許容する広大無辺の地球環境が必要でした。この条件を欠くためにやがて「第二の波」は衰退して「第三の波」が来るであろうというのが、この著者の主張でありました。あれから30年、A・トフラーが予言したように、皆さんはパソコンや携帯端末やインターネットを介して第三の波を日々実感しておられることでしょう。彼の予言はものの見事に的中いたしました。

こうして日本から第二の波が去っていくと、それは工業生産による富の獲得の手段が消失することをも意味します。この事が、長引く不況を誘引し、失業や就職難を惹起し、家計を圧迫して貧困化を招き、ひいては税収の減少から政府の財政を逼迫化させて、福祉や保健にかかるセーフティネットを破壊して生きずらさを作るという悪循環の経路にはまって行きます。この悪路や悪循環から脱出しようとしても、先にトフラーが列挙した「第二の波」の時代の特性、規格化、中央集権化、同時化、極大化、集中化、専門分業化の束縛から決別できない政治や官僚機構が自家中毒状況に陥っていて時代の出口を探しあぐねているというのが現状です。

「第三の波」の時代にあっては、中央集権化は地方分権化へ、集中化は分散化へ、規格化はデファクトスタンダード化へ、極大

化は最適化へ、専門化はプロシューマー化へ、同時化は24時間化へ、というように変化していきます。現今の政治や経済の体たらくは、こういう時代変化への対応の失敗にその原因が有るはずです。

この度の東日本大震災の被災地三陸地方にあって、ほとんど死者を出さなかった寒村があります。そこでは過去に何故か政治や行政の恩寵が受けられず、港を守る堅固な防波堤や鉄壁を誇る海岸線の防潮堤などが造られませんでした。それゆえ、これらの集落では津波対策としてひたすら逃げることを人々は訓練してきました。そして、3月11日午後2時46分あの大地震が起こるや人々は日ごろの訓練通り裏山めがけて逃げ込みました。30分後に高さ30mの悪霊が襲来しましたが、集落は損壊したものの死者は一人もいませんでした。片や、立派な装備の防波堤や防潮堤・豪華な避難所までを備えていた地域では避難所ごと流出して多数の死者を出してしまいました。昨今、何かといえば「想定外」という言葉が多用されています。これは、想定された値に対して専門的に規格化された極大なシステムが全く作動しなかったという意味で、「第二の波」の限界をさらけ出したと言わなくてはなりません。

それゆえにこの度の大津波は、私たち日本人の明治150年の近代化の真骨頂～大量生産・大量消費・大量廃棄に環境破壊～を文字通り超克＝乗り越えて、次の時代にいざなう使者だったのかもしれません。この災害を経験した以上、私たちは決して単純に過去を回復するという意味の「復旧」・「復活」や「回復」をなすべきではありません。「災いを転じて福となす」、これを機に「近代を超克する」新規のパラダイムを創始しなくてはなりません。それができるのは、新しい感性に敏感であるはずの若者たちです。つまり、現今の窮状を救えるのは皆さんであり、皆さんしかいないのです。それゆえ、皆さんがこれに対応する能力が無いのであれば、日本人の全てが絶望の淵に立たされることになるでしょう。

それゆえ皆さんには道草を食っている暇はありません。「一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るゝをも傷むべからず、人の嘲りをも恥づべからず」と『徒然草』188 段、あの有名な「ある人子を法師になして」の段にはありますね。「敏き時は、則ち功あり」と論語にもあります。皆さんが、学ばなくてはならないと思っているものが見つかったらその中心に向かって迷わず真っすぐに突き進んでいきましょう。そしてそこで新しいパラダイムを構築するのです。

皆さんも新聞・テレビなどの報道を通じてよくご存じだと思いますが、ここ一両年大学生の就職が極端に厳しくなっています。これは冒頭に述べたように「第二の波」と「第三の波」のはざ間にあって、日本社会の雇用力が急速に衰弱しているために他なりません。

幸い本学は例外で、昨年（2009 年度）は約 96.0%の就職率を確保して全国 870 大学中第 34 位の好成績を実現しました。今年（2010 年度）も 97.4%と全国平均 68.8%に対して 30%も高い就職率を確定しています。これは、座学と合わせた実習・演習、加えて「未来の実践的担い手を育てる」とした本学のミッションの社会貢献活動など現実の社会現場に直結するフィールドワークに多くの学生が積極的に参加していることが与って大きいためです。これは先の「大学憲章」にもあるとおり山梨県立大学が誇る一大特長です。

フィールドワークが高い就職率につながるというのは、そこでの活動を通じて、自分の無知が発見され、したがって何を学べば良いかがよく分かってくるからです。それによって発見された学びの主題を座学を通じて知識として普遍化していく知的作業、これが不断に行われることが重要なのです。

本学では、ここ一年、学生達のキャリア創造に向けて指導助言していく体制を強化してきました。キャリアサポートセンターが

それですが、自分は何者で、どういう専門性を通じて社会に貢献していきたいか、そのためには何をどのように学んでいけばよいか、そういうキャリア形成について指導や助言をしております。このセンターの指導監のきめ細かな指導も与って高い就職率を実現してきたのです。

さらに、これからの皆さんは既存の職業に就くという「就職」だけではなく、新時代の新しい職業を創造していくという意味の「職業創造」、つまり『就職』ではなく『創職』あるいは業を起こすという意味の「起業」＝アントレプレナー精神が求められています。上に述べたように、日本列島を離れた「第二の波」はすでに、中国・韓国などの東アジア、タイ・マレーシアなどの東南アジアからインド亜大陸にまで去っていき、逆にそこで生産された日本資本による完成品が国内に輸入され、これが国産工業製品の４分の１以上を占めるという事態にまで達しています。この事も企業の採用幅を著しく狭めている原因になっているのです。

しからば、私たちは国内にあって「第三の波」の遺伝子を持った新しい産業、新しい職業を創造していかなくてはなりません。皆さんは、そこまでも視野に入れながら今日から直ちに学び始めましょう。そこは、広大な未開の地ですが、将来、皆さんが生きる肥沃の大地でもあるのです。

そのために、本学では、２年前からタイ王国のナコン・ラチャシーマ・ラジャパット大学（NRRU）と非公式に学術交流を行っておりましたが、先月７日、正式に教育交流の覚書を交わして参りました。これは、これから益々重要度を増すであろうアセアン諸国との国際関係をにらんだ、本学の東南アジア学術交流の出発点となるもので、来月には、NRRU に本学卒業生が教員として２名、学生として１名、現地に就職並びに留学することになっております。

この他にも、新たに英国イースト・アングリア大学、同じく英国キール大学とも包括的交流協定を締結し、すでに学生の留学日

程も決定しています。その他に、米国の一校とは現在最終的な協議に入っております。これらの他にも、中国北京聯合大学、北京大学対外漢語教育学院、韓国三育大学、同じく韓国忠北道立大学、またこれは看護学部のみですが韓国の名門高麗大学等と活発な学術交流を行っております。

これら諸外国とのネットワークを通じて、みなさんの「第三の波」への積極的な参加を促していきたいと考えております。

以上、皆さんの今日から始まる健闘に期待を込めて私の歓迎の言葉と致します。ご清聴ありがとうございました。